

平成 27 年度 SGH 事業 成果と課題

I 校内における評価

- 1 校内における評価について … 1
- 2 生徒の意識の変容 … 1
- 3 生徒による授業評価 … 4
- 4 学校自己評価にみる SGH の取組 … 7
- 5 目標設定シート … 9

II 外部有識者による評価

- 1 SGH 評価委員会 …11
- 2 SGH 運営委員会 …12

III 成果の普及に係る取組

- 1 学習活動の公開 …14
- 2 SGH 研究協議会 …14
- 3 実践報告・広報活動 …14
- 4 他校からの学校訪問の受け入れ …15
- 5 新聞報道 等 …16

IV 成果と課題 …17

I 校内における評価

1 校内における評価について

生徒、保護者、教職員の意識の変容を見るため、以下のアンケート調査を実施した。

(1) 生徒対象

- ① 意識調査：平成 28 年 2 月に、1 年生 282 名（回答数 270 名）、2 年生 283 名（回答数 270 名）を対象に実施。質問項目と調査結果の全体像は、巻末の参考資料を参照。
- ② SGH 授業評価：平成 28 年 2 月に、1 年生 282 名（回答数 270 名）、2 年生 283 名（回答数 270 名）を対象に実施。質問項目と調査結果の全体像は、巻末の参考資料を参照。

(2) 保護者対象

「学校評価」の資料としての「外部アンケート」において併せて実施。（平成 27 年 9 月・平成 28 年 1 月の 2 回実施）

(3) 教職員対象

「学校評価」として実施。（平成 27 年 9 月・平成 28 年 1 月の 2 回実施）

2 生徒の意識の変容

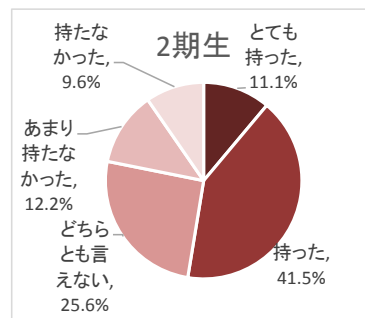
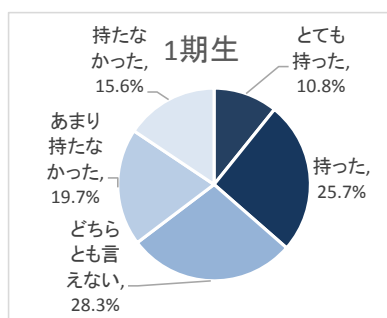
はじめに

SGH 事業により本校生徒の意識について前向きな変容が起こっているかどうかを見るために、平成 28 年 2 月に、上記のような「意識調査」を実施した。質問は 19 項目、ほぼ昨年度と同じものとしたので、SGH 1 期生（2 年生）の 1 年次との経年比較を分析することができるとともに、1 期生と 2 期生の今年度比較及び過年度比較による事業改善の効果の有無をみることもできる。その中から特徴的な点について分析をしてみたい。

(1) 現代社会に対する関心と行動意欲 < 1 期生と 2 期生の今年度比較 >

【Q17 課題研究など SGH 活動をする中で、社会と直接関わる活動や社会に貢献する活動に興味を持ちましたか。】

「とても持った」及び「持った」という回答が、2 期生では 16.1 ポイント増加している。「持たなかった」又は「あまり持たなかった」という回答も、2 期生では 13.5 ポイント減少している。

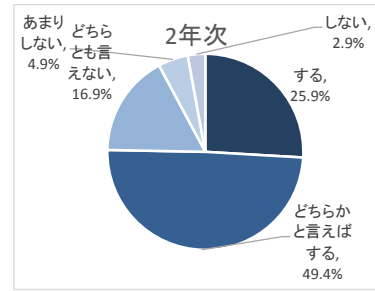
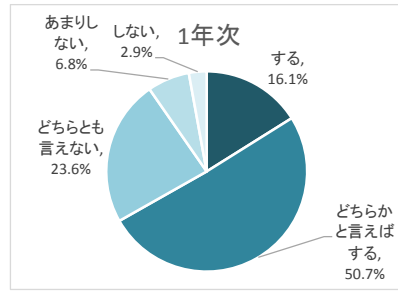


これは、課題研究のテーマである「観光」のクロスエリア型研究を広い視野と社会への深い関心にもとづいて進めるため、2 期生には課題設定の仕方においてまずは自分の関心をもった分野を大切にすべきこと（キャリア教育とのリンク）を指導したり、第 1 回のフィールドワーク先でグローバル時代特有の課題を抱える人々（グローバル課題と地域課題のリンク）を訪問したりしたことで、社会への関心が高まってきたものと考えられる。

(2) 論理的思考力, 批判的思考力 <1期生の1年次と2年次の経年比較>

【Q31 自分が失敗または成功をしたときに, その原因を分析してこれからは生かそうとしますか。】

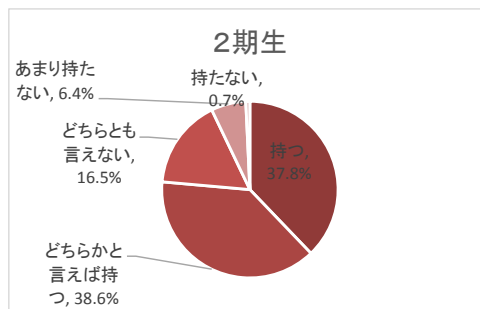
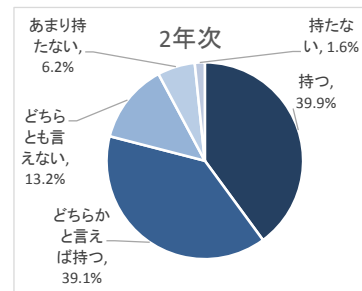
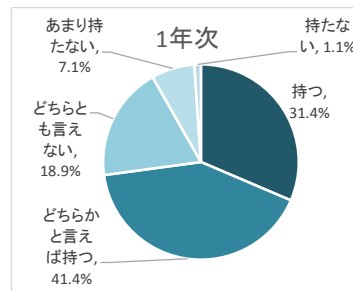
「する」という回答が2年次になると9.8ポイント増加したほか、「する」又は「どちらかと言えばする」の合計も8.5ポイント増加している。もちろん高校生活の学業全般・特別活動な



どでの人間的な成長の結果と言えるが, SGH の学びにおいても, 課題研究の試行錯誤, 課題研究・英語プロジェクトでのプレゼンテーションと質疑応答の学びなどを繰り返し重ねる中で, PDCA サイクルを回す生き方が育ってきていると考えられる。

【Q33 他人の話を聞くときに, 自分なりの疑問や批判を持ちますか。】

「持つ」という回答が2年次になると8.5ポイント増加したほか、「持つ」又は「どちらかと言えば持つ」が2年次になると約8割となった。また1期生1年次と2期生との過年度比較を行ってみると, 2期生では「持つ」又は「どちらかと言えば持つ」が4.6ポイント増加している。これは2期生が, 課題研究や英語プロジェクトにおいて探究活動のスキルとなる英語ディベートの訓練を繰り返し行っていることの効果であると考えられる。

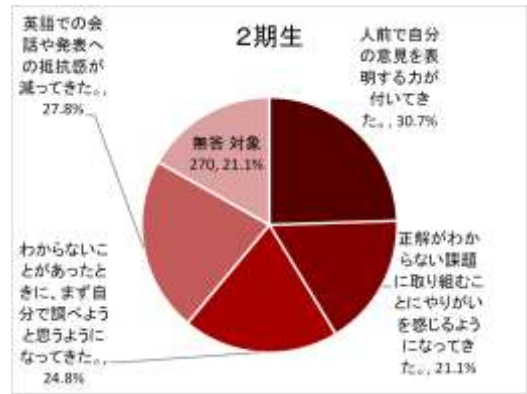
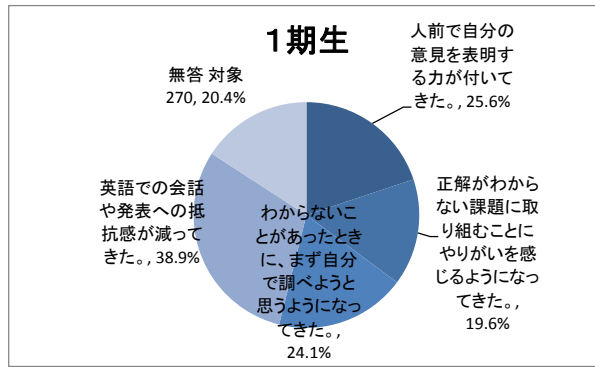


(3) コミュニケーション能力, 問題解決力 <1期生と2期生の今年度比較>

【Q18 SGHの活動を通して, 自分の中で以下のような変化があったと思う人は該当するものを全て選んでください。】

- ◆選択肢 ①人前で自分の意見を表明する力が付いてきた。
- ②正解がわからない課題に取り組むことにやりがいを感じるようになってきた。
- ③わからないことがあったときに, まず自分で調べようと思うようになってきた。
- ④英語での会話や発表への抵抗感が減ってきた。

◆のべ回答数 1期生: 347 2期生: 339

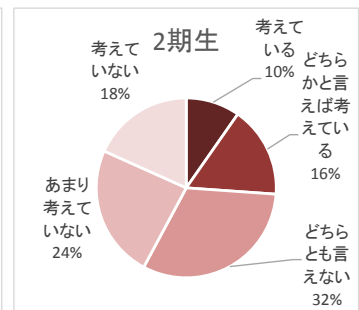
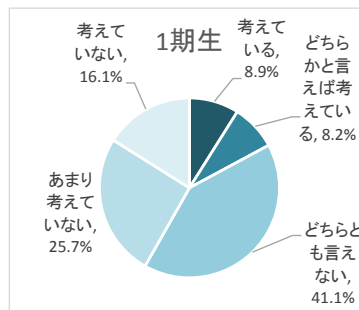


まず、1期生に特徴的なことは、「英語での会話や発表への抵抗感が減ってきた」という回答が4割の生徒に見られ、2期生と比べても11.1ポイント多い点である。この差は、実際に海外の人々と英語でコミュニケーションを進めた体験の有無によるものと考えられ、台湾研修旅行の意義が確認できるであろう。一方で2期生に特徴的なことは、「人前で自分の意見を表明する力が付いてきた」という基本的なコミュニケーション力についての肯定的回答が1期生に比べて5.1ポイント増加している。このことは、例えば、1期生の「2年次課題研究発表会」の折に、聴衆である2期生が物おじせず質問や批判を堂々と展開する様子がしばしば見受けられることと一致しているように思われる。しかしそうはいっても「人前で自分の意見を表明する力が付いてきた」と回答している生徒は全体の3割弱にとどまっているわけであり、パワーリスナーを育てるといふ課題研究の要諦にはまだまだ届いていないと言えよう。

(4) グローバルな進路意識 <1期生の1年次と2期生の過年度比較>

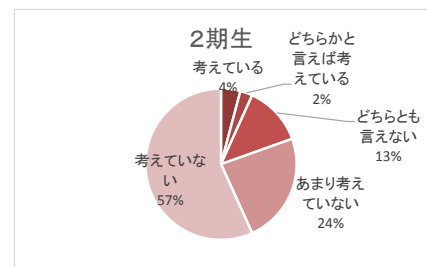
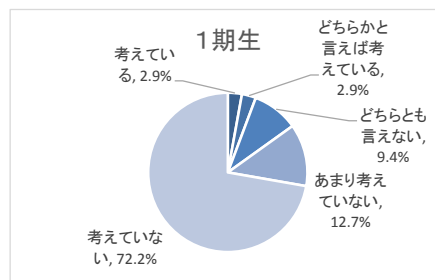
【Q26 国際化に重点を置く大学への進学を考えていますか。】

2期生の方が「考えている」又は「どちらかと言えば考えている」の回答が8.9ポイント多い。これは入学直後にSGHの学びの意義について、SGU(東北大学)の教授による講演を聴き、高大接続への目配りをしたことが作用していると考えられる。



【Q27 海外の大学への進学を考えていますか。】

2期生の方が「考えていない」という回答が15.2ポイント減少しており、海外で学ぶと言う選択肢が本校生の視野に入りつつあると言える。



「考えている」及び「どちらかと言えば考えている」という回答は、%で見ると大して違いがないようにも見えるが、2期生は平成28年2月現在で「トビタテ！留学JAPAN」にアカデミック・テイクオフコース及びロングコースあわせて3名が出願しており、実際に行動におこそうとしている。

3 生徒による授業評価

はじめに

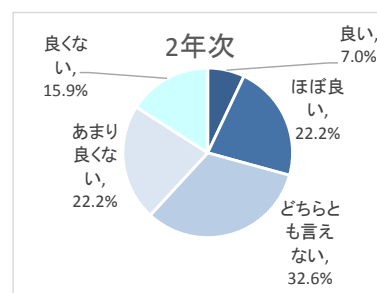
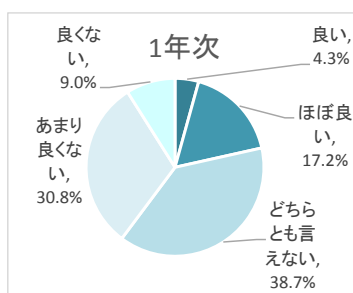
SGHの学びを推進する核となっている授業について、平成28年2月に、上記のような生徒による「授業評価」を実施した。質問は16項目、ほぼ昨年度と同じものとしたので、SGH1期生（2年生）の1年次との経年比較を分析することができるとともに、1期生と2期生の今年度比較及び過年度比較による事業改善の効果の有無をみることもできる。その中から特徴的な点について分析をしてみたい。

(1) 課題研究「長野のグローバル戦略を探る（1年次）」「世界から見た長野のグローバル戦略（2年次）」（総合的な学習の時間）

①<1期生の1年次と2年次の経年比較>

【Q3 活動内容の指示が明確で分かりやすかったですか。】

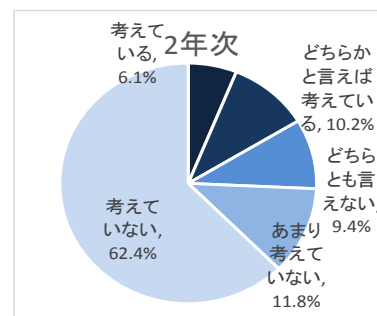
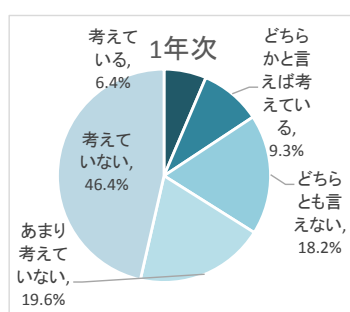
「良い」又は「ほぼ良い」という回答が、2年次では7.7ポイント増加した。授業内容の体系化と教員指導体制の改善、生徒スタッフ組織によるファシリテーションなどを導入したことの効果であると考えられる。



しかし、「良い」又は「ほぼ良い」という回答がまだまだ3割弱にとどまっているということは、教員指導体制の更なる改善が必要であることを示している。

【Q28 現在取り組んでいる課題研究の分野あるいはテーマに関連する学部・学科への進学を考えていますか。】

「考えていない」という回答が2年次では16ポイントも増加した。これは、1年次から2年次にかけて生徒の進路志望が変化したと言うだけでなく、1年次の課題研究のテーマ設定が自分のキャリア設計とつながっていなかった

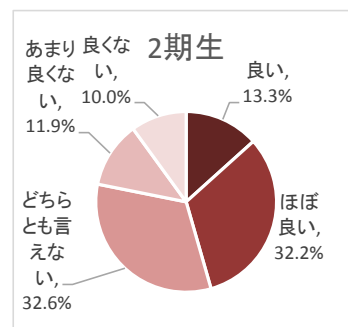
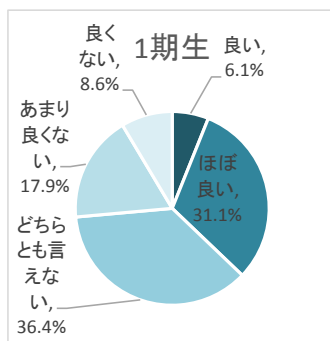


ことに起因している面が大きいと言えよう。キャリア教育とのリンクの必要性を反省させられる。また、ここには一つのジレンマがあることにも気を付けたい。本校のキャリア教育・進路指導の流れにおいては、夏から秋にかけての頃が文理選択を考えさせる時期であり、これを早めることは困難である。一方で課題研究のテーマ設定は、なるべく早い方がよい。両者の最適なバランスのありかたについて、さらに考えていきたい。

②< 1期生の1年次と2期生の過年度比較>

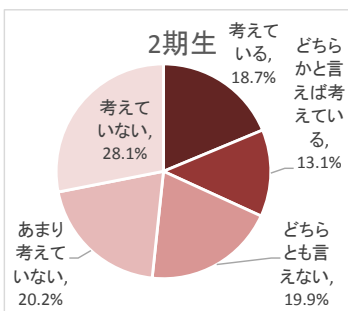
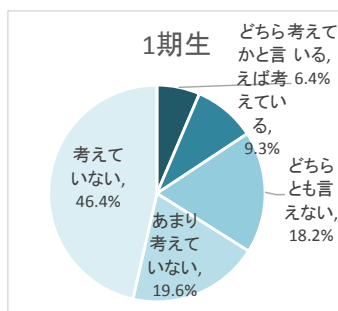
【Q5 全体として良い授業でしたか。】

「良い」又は「ほぼ良い」という回答が、2期生では8.3ポイント増加しており、カリキュラム改善の成果が出ていると言えよう。しかし同回答が、全体から見れば半数に達していないことは深く反省すべきであり、授業改善がより一層必要であると考えられる。その際、授業に対する生徒の問題意識（自由記述欄の内容）にも変化が見られることに注目したい。すなわち1期生には、教科学習のほかに課題研究を学ぶこと自体への疑問が大きかったのに対し、2期生には、課題研究で課せられる学びのペースが早いために負担過重になっていることへの不満や、PCが一人一台に配備されていないことなどへの不満が大きい。それらは、次年度に向けて解決が十分可能である。



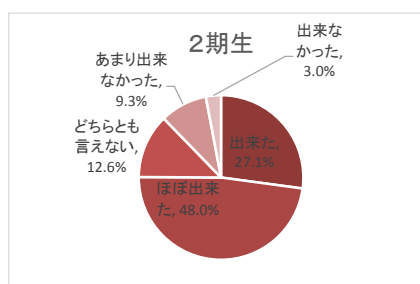
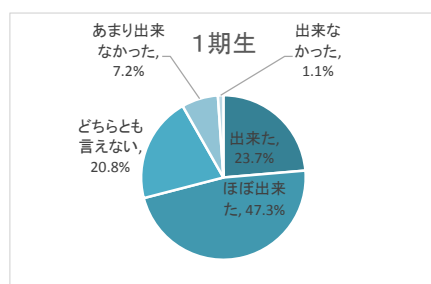
【Q28 現在取り組んでいる課題研究の分野あるいはテーマに関連する学部・学科への進学を考えていますか。】

「考えていない」という回答は、2期生では18.3ポイント低下している。課題研究の分野選択をキャリア教育の文理選択の時期と重ねたことの効果であろう。しかしこのことは上述のような課題研究の過密化をもたらしてしまった。



【Q2 友達と協力しながら、自ら積極的に活動できましたか。】

「出来た」又は「ほぼ出来た」という回答は、1期生・2期生ともに7割強に及んでおり、2期生では2.3ポイント増加している。協働の学

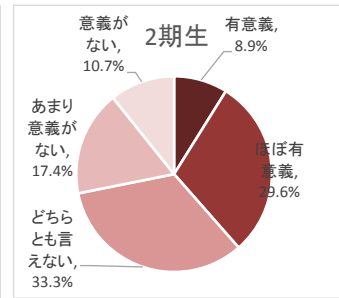
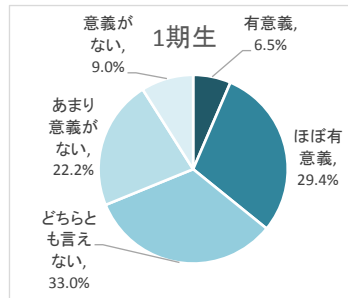


びについては、SGH 指定校となって本格的に始まったものである。本校では、協働の学びの定着がほぼ実現していると言ってよいであろう。

(2) 「グローバル経済」(学校設定教科 SGH) <1期生の1年次と2期生の過年度比較>

【Q8 講演(事前・事後の授業も含む)は、経済のグローバル化の背景や現状について理解を深めるために有意義でしたか。】

1年次に並行して学習する世界史A及び現代社会と「グローバル経済」のゲスト講演との連関が薄かった昨年度の反省から、今年度は全体の体系化を試みた。しかし「有意義」又は「ほぼ有意義」という回答は、微増とはいえ、有意と思えるような変容が見られなかった。講演会の実施



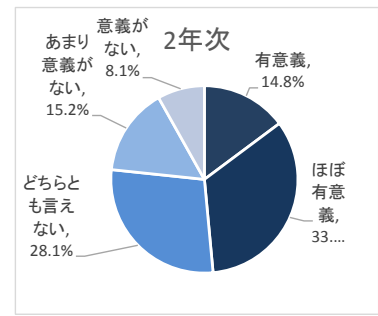
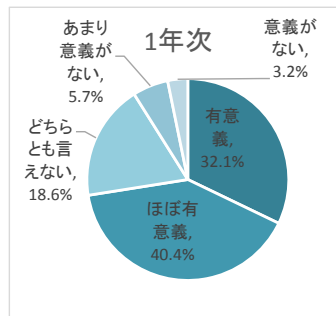
時期に日課上の負担がかかってしまったことを反省するとともに、世界史A及び現代社会とのより緊密な有機的結合を作ることが課題である。

(3) 「英語プロジェクトI・II」(学校設定教科 SGH)

①<1期生の1年次と2年次の経年比較>

【Q11 英語によるプレゼンテーション力やコミュニケーション力を高めるために有意義でしたか。】

2年生では、台湾研修で現地校とのグループ交流の中心となるプレゼンテーションに向けた学習が中心となった。グループ活動の難しさとともに、現地でペアを組んだ生徒との会話に悔いが残る生徒が多く、もっと会

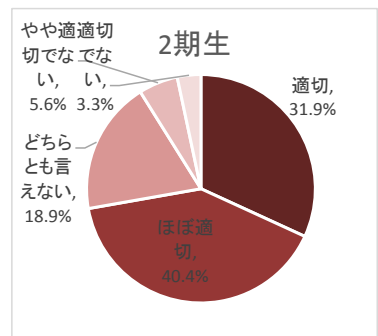
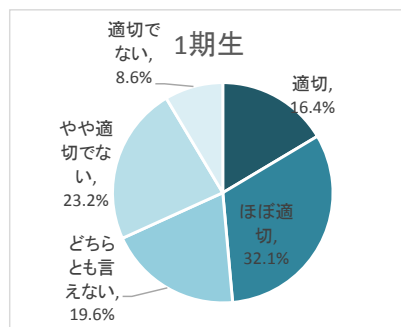


話力養成に時間をかけてほしかったと感じた生徒が少なくなかったようである。それが、「有意義」又は「ほぼ有意義」という回答が、2年次で24.7ポイント減少した理由であると考えられる。しかし限られた時間の中で、台湾との交流を進め、現地でのプレゼンテーションの準備を進める学習内容は、めいっばい詰め込まれていたとも言える。台湾研修旅行における現地交流の原動力になったのが、この科目である。今後、学習内容の精選をはかることが課題である。

②<1期生の1年次と2期生の過年度比較>

【Q12 授業環境(パソコン室, LL教室, パソコンの機能等)は適切でしたか。】

昨年度は、校内の生徒PCが情報処理室の42台のみで、発表会にパワーポイントの作成さえできなかった。その反省から、今年度は同窓会の力で、LL教室に2人に1台のPCを購入した。そのためにICT環境が一定の改善をされ、2期生の「適切」又は「ほぼ適切」という回答が、23.8ポイント増加した。しかし1人1台のPC環境がないと課題研究には対応できないことから、次年度にはさらなる改善をはかりたい。



4 学校自己評価にみる SGH の取組

はじめに

本校では年2回、学校の重点的な取組に対して、保護者・教員・学校評議員が評価を行う「学校自己評価」を実施している。これと上述した生徒による授業評価が組み合わせることで、学校運営のPDCAサイクルを回している。この節では、「学校自己評価」におけるSGHの評価について、保護者と教員の意識の変容について分析する。

【評価項目・観点：グローバル人材の育成「SGH 事業を活用し、グローバル人材を育成するためのカリキュラムの開発と実践に努めている。」】

◆選択肢 A：充分達成 B：概ね達成 C：やや不十分 D：不十分 U：わからない

*ただし、選択肢UのみH27より新設。

(1) 保護者による評価

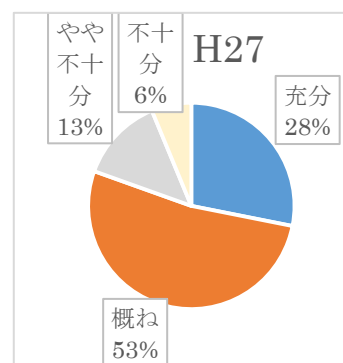
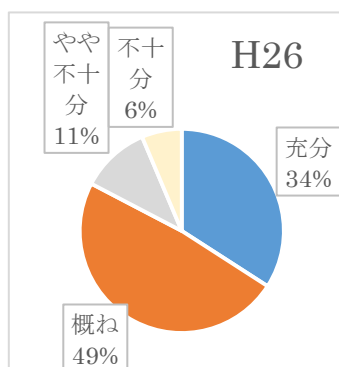
①<1期生の1年次と2年次の経年比較>

A 平成26年度最終評価（1年保護者1月・187名）

B 平成27年度中間評価（2年保護者9月・135名）

「不十分」又は「やや不十分」

という回答が、2年次になって2ポイント増加している。また、「充分」という回答が、6ポイント減少した。2年次の9月までの間に保護者にSGHの学びについて報告する機会がないことや、生徒の課題研究の学びへの満足度が今一つ足りないことなどが背景にあると考えられる。



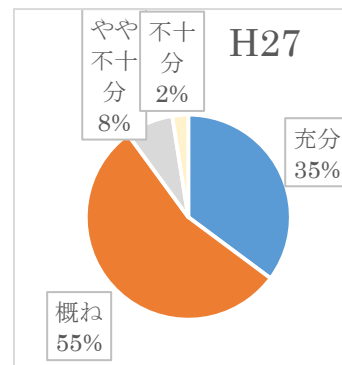
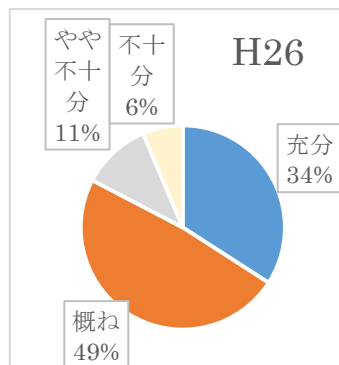
②<1期生の1年次と2期生の過年度比較>

A 平成26年度最終評価（1年保護者1月・187名）

B 平成27年度最終評価（1年保護者1月・218名）

「不十分」又は「やや不十分」と

いう回答は、2期生の保護者では、7ポイント減少した。これは、今年度になって課題研究中間発表などSGHの学びの機会を折々に広く公開することにつとめたことなどが反映していると考えられる。また10月以降、国際オリンピック博物館連盟総会への生徒派遣など、SGHの学びを通じた社会参画も社会に認知される



ようになったためであろう。この保護者の評価が次年度につながるよう、保護者・地域への公開と学びの内容の深化をはかっていきたい。

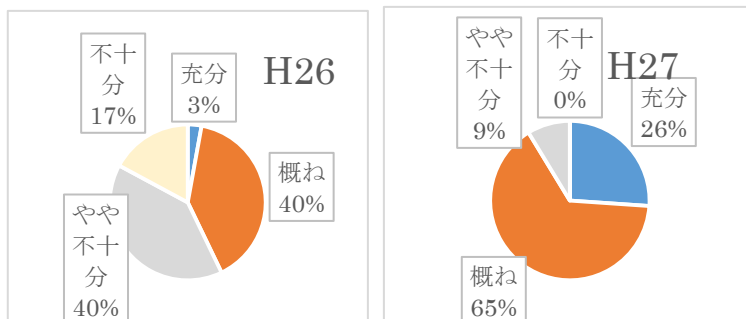
(2) 教員による評価

＜昨年度と今年度の経年比較＞

A 平成 26 年度最終評価（2 月・35 名）

B 平成 27 年度最終評価（1 月・46 名）

「充分」又は「概ね十分」という回答が、今年度の最終評価では 47 ポイント増加した。これはほぼ倍増と言える。自由記述欄には、「2 年生の課題発表会は見ごたえのあるプレゼンが多く、頼もしく思った。更に独創性のある研究が育つこ



とが今後の目標である。」，「SGH の課題研究がキャリア教育とリンクするようになってきていると思う。」などの意見が寄せられた。昨年度の SGH 指定一年目の試行錯誤の時期から、今年度は職員が様々な場で協働しあいながら SGH 事業を推進しようとしている。

5 SGH 目標設定シート

【別紙様式7】

ふりがな	ながのけんながのこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	長野県長野高等学校		

平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		33人	62人	人	人	人	560人
	SGH対象生徒以外:		人	20人	8人	5人	人	人
目標設定の考え方: 1・2年生の全生徒が取り組む。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		0人	5人	人	人	人	20人
	SGH対象生徒以外:		0人	0人	1人	0人	人	人
目標設定の考え方: SGHの活動により留学への意識が高まると考える。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		71%	71%	%	%	%	90%
	SGH対象生徒以外:		%	60%	55%	68%	%	%
目標設定の考え方: SGHの取組により多くの生徒がグローバルに活躍することが見込まれる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		8人	22人	人	人	人	40人
	SGH対象生徒以外:		人	10人	6人	0人	人	人
目標設定の考え方: エコノミクス甲子園、科学の甲子園、小論文コンテスト等の入賞者数。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		60%	60%	%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		60%	60%	60%	60%	%	%
目標設定の考え方: TOEFLを用いて検証していく。								
(その他本構想における取組の達成目標) 世界や社会の動きに関心を持ち、学ぶことに意義を感じている生徒の割合								
f	SGH対象生徒:		83%	82%	%	%	%	95%
	SGH対象生徒以外:				63%	69%	%	%
目標設定の考え方: SGHを通して育てたい資質を検証する。2年終了時(26年度は1年終了時)に意識調査を行う。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(30年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	人	80人	40人	320人	人	人	人	320人
	目標設定の考え方: 台湾研修及び米国リーダー研修の参加人数(延べ人数)							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	人	0人	284人	566人	人	人	人	600人
	目標設定の考え方: SGH対象全生徒							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	校	0校	10校	12校	校	校	校	20校
	目標設定の考え方: 台湾研修及び米国リーダー研修における連携を中心に、善光寺グローバルサミット等も活用して行く。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	0人	87人	80人	人	人	人	50人
	目標設定の考え方: 7人×回数							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	0人	91人	258人	人	人	人	40人
	目標設定の考え方: 2人×回数							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	人	284人	567人	566人	人	人	人	600人
	目標設定の考え方: 小論文コンテスト等への参加。更に課題研究の成果を発信するために各種大会に積極的に参加して行く。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	人	0人	0人	34人	人	人	人	21人
	目標設定の考え方: 積極的に受け入れて行きたい。ギャップタームプランによる受入も進めたい。							
h	先進校としての研究発表回数							
	回	0回	2回	7回	回	回	回	5回
	目標設定の考え方: 課題研究の成果を、校内に留まらず、広く世界に発信する。SGHの取組についても発表して行く。							
i	外国語によるホームページの整備状況							
	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
		×	△	○				○
	目標設定の考え方: 順次できるところから更新してゆく。							
j	(その他本構想における取組の具体的指標) 海外の高校生と課題研究の内容等について英語でディスカッションできた生徒数							
		0人	30人	337人	人	人	人	340人
	目標設定の考え方: 1学年の1/2、2学年の3/5、3学年(40人)の3/4							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	923	889	852	850	0	0	0
SGH対象生徒数			285	566			
SGH対象外生徒数			567	284			

Ⅱ 外部有識者による評価

1 SGH 評価委員会

- (1) 日時 平成 28 年 2 月 15 日 (月)
15:30～16:20 「英語プロジェクト I」授業見学
16:30～17:50 評価委員会

(2) 会場 本校大会議室

- (3) 委員 松本 清氏 (長野運送株式会社社長)
南波克彦氏 (上松区長)
小島雅世氏 (長野市 PTA 連合会副会長)
藤井純子氏 (東口メンタルクリニック臨床心理士)
中村正行氏 (信州大学工学部教授)
竹前紀樹氏 (長野市民病院長)
鷲澤幸一氏 (炭平コーポレーション社長) 欠席

評価委員には折々の SGH 関係の行事・授業を見学していただいている。

(4) いただいたご意見

- ・(見学したディベートの授業について) いつも発言する生徒の声が小さいことが気になっていたが、今日の授業では大きな声で生き生きと話しており、これまでと同じ学校とは思えないほどだった。SGH とは、たいへんいい学びをしていると感じた。(複数)
- ・SGH は先進的であり、キャリア教育としても経験としても有意義だとは思いますが、既に行われている授業だけでも生徒の負担は大きいので、負担が大きくなりすぎないように配慮が必要である。(複数)
- ・生徒には適度な負荷がある方が成長することは確かで、時間のやり繰りもうまくなるのではないか。
- ・課題研究の内容を見ると、文系のテーマが多く、文系志望者のみが増えるのではないかと心配になる。
→文系・理系の志望者割合はほとんど変わっていないこと、理系のテーマもあることを、教頭・係より説明した。
- ・子どもは SGH に必死で取り組んでいる。逆に教科の英語の授業の単語の暗記などには消極的だったが、SGH の活動をする中で暗記も大切だと気づいて今は頑張っている。どちらも頑張ってもらいたいと願っている。(保護者の委員)

(5) まとめ

委員各位は本校にとって身近な方々であるだけに、SGH 事業の可能性とともに陥穽を戒める助言をいくつかいただいたことが、印象的であった。課題研究発表会や公開授業などにも折にふれて参観して下さったうえでの助言であり、授業中の生徒の活動的な姿に対する積極的評価をいただいたことを、教員一同で共有したい。

2 SGH 運営指導委員会

◆第1回運営指導委員会

- (1) 日時 平成27年9月9日(水)
13:10~13:40 「英語プロジェクトII」授業見学
13:45~16:00 運営指導委員会
- (2) 会場 本校大会議室
- (3) 出席委員 近藤誠一氏(委員長, 長野県文化振興団理事長)
滝澤 正氏(副委員長, 上智大学教授)
仁田知樹氏(青年海外協力隊駒ヶ根訓練所長)
矢高則夫氏(共同通信社論説委員)
(オブザーバーとして)
金子元昭氏(シナノケンシ(株)社長)
中西 茂氏(読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員)
ほか伊藤学司氏(長野県教育委員会教育長)をはじめとする教育委員会関係者
- (4) いただいた主なご意見(詳細な内容は巻末の「SGH 運営指導委員会議事録」を参照)
- ・ 昨年の反省をふまえての改善策を明確にして、意欲的に取り組んでいるところが大変良い。
 - ・ 組織体制の強化、生徒に対する指導の緻密化など、いくつもの改善策を頼もしく思った。やはり体制を整えるということは大事なことである。
 - ・ 生徒が運営を積極的に担っている点も高く評価したい。
 - ・ SGH の効果が見えてくるには時間がかかるから、長期スパンで物事を考えていくとよい。
 - ・ 長い人生を考えれば、大学に入った後や、企業で活動するなかで、SGH の学びは役立つものであろう。受験指導との両立など苦労も多いと拝察するが自信を持って進めてほしい。
 - ・ 日本人にとってプレゼンテーションに上達することばかりが大事ではない。得意とする、相手の心の中にある共感をよびおこすというアプローチも大事である。
 - ・ 社会を変えていくためにも、SGH 校は、取組の社会的発信を意識的に行ってほしい。
 - ・ 米国リーダー研修報告会を実行し、それを保護者・地域の住民・中学生に公開したことを高く評価したい。SGH 事業では、「他をとりこむ」取組がとても重要になってこよう。

◆第2回運営指導委員会

- (1) 日時 平成27年11月11日(水)
13:45~16:00 運営指導委員会
- (2) 会場 長野県上田高等学校同窓会館会議室
- (3) 出席委員 滝澤 正氏(副委員長, 上智大学教授)
遠藤守信氏(信州大学特別特任教授)
仁田知樹氏(青年海外協力隊駒ヶ根訓練所長)
矢高則夫氏(共同通信社論説委員)
(オブザーバーとして)
大井恭子氏(清泉女子大学教授)
中西 茂氏(読売新聞東京本社調査研究本部主任研究員)
ほか菅沼 尚氏(長野県教育委員会教育次長)をはじめとする教育委員会関係者
- (4) いただいた主なご意見(詳細な内容は巻末の「SGH 運営指導委員会議事録」を参照)
- ・ 現在、多くの高校生が大学入試対策としての勉強ばかりしているがそれがどれだけ本人と社会のためになっているのか疑問だ。米国の学生は勉強したことを使って社会問題も考え、自

分の人生も主体的に決めている。課題研究発表会のプレゼンテーションなどに生徒の意気が感じられ、SGHの目指す方向が出てきたと感じる。

- ・台湾研修で多くの交流があるのが良い。異文化との触れ合いから生徒が何を得るかを追究してほしい。
- ・2年生が新たに「世界から見た」という視点を加えているが、外国を知り、日本、自分を知った上で「外国からどう見えるのか」を考えるのはグローバル化の本格的な思考訓練だ。
- ・言いたいことを持つことが大切。基礎をしっかりと勉強した上で、その人だけの個性的な何かを入れ込む工夫が必要。対象の中にキラッと光るものを見いだすセンスを若いときからつけていくことだ。

◆第3回運営指導委員会

(1) 日時 平成28年2月2日(火)

14:30～15:20 課題研究中間発表会見学・助言

15:30～16:30 運営指導委員会

(2) 会場 本校大会議室

(3) 出席委員 近藤誠一氏(委員長, 長野県文化振興団理事長)

滝澤 正氏(副委員長, 上智大学教授)

赤池 学氏((株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長)

仁田知樹氏(青年海外協力隊駒ヶ根訓練所所長)

ほか菅沼 尚氏(長野県教育委員会教育次長)をはじめとする教育委員会関係者

(4) いただいた主なご意見(詳細な内容は巻末の「SGH運営指導委員会議事録」を参照)

- ・グローバルを意識させ、協働の学びができる人間を育てようとする以上、発表すると同時に発表される力を育てるオーディエンス教育にさらに力を入れてほしい。
- ・最終成果を英語論文にするのはたいへん良い。自分の探究活動を世界に知らしめるツールとしての英語教育と論文指導に力を入れていてもらいたい。
- ・発表のレベルが、焦点の絞り方でも報告の仕方でも昨年より進歩している。パワーポイントを使って発表できる環境が整ったことも良かった。
- ・グローバル化とは自己相対化であり外からの視点を持つことである。また、質問できて「次の矢」がなかなか出せない。これらは普段の授業からトレーニングする必要がある。まだまだ劇的に進歩したとは言えない。
- ・先輩の学びを後輩が生で知り、学びが蓄積される「場」をさらに作ってほしい。

◆まとめ

第一線でグローバルに活躍している体験から、本校のSGH活動に不足している部分を的確に指摘する貴重なご意見ばかりである。特に幾つもの厳しい指摘をいただいたことは、今後の課題を考える上でたいへん参考になった。その後ろにある本校への期待を感じながら、ご意見を学校全体で共有し、来年度に生かしていきたい。

Ⅲ 成果の普及に係る取組

1 学習活動の公開

(1) 発表会

①課題研究発表会（善光寺グローバル・プレサミット）全体会

期日：11月12日(木)

会場：本校体育館

参観者：県内教育関係者7名，県内高校生5名，県外教育関係者1名，保護者12名，
報道関係者3名

②課題研究中間発表会

期日：2月2日(火)3日(水)

会場：本校1年生ホームルーム教室，芸術科教室

参観者：県内教育関係者15名，県外教育関係者2名，企業関係者8名，保護者28名，
報道関係者4名

(2) 米国リーダー研修報告会

期日：5月23日(土)

会場：本校小体育館

参観者：小学生16名，中学生298名，保護者162名，地域の方78名

(3) SGH 授業公開

運営指導委員会に併せて教育関係者等に英語プロジェクトⅡの授業を公開した。

期日：9月9日(水) 会場：本校パソコン教室

参観者：県内教育関係者24名

2 SGH研究協議会

本校のSGH事業を報告し，広く意見をいただく目的で実施した。

期日：2月3日(水)

会場：本校校長室 他

参加者：県内教育関係者15名，県外教育関係者2名，企業関係者8名，本校教員6名

3 実践報告・広報活動

(1) 実践報告

①米国研修情報交流会

期日：8月12日(水)

会場：長野県上田高等学校

発表者：小川幸司教頭

発表テーマ：「SGH『米国リーダー研修』の現状と課題」

②グローバル人材育成教育学会 第2回中部支部大会

期日：9月5日(土)

会場：松本大学(松本市)

発表者：大井基成校長

発表テーマ：「観光を核にした国際都市NAGANOを担うグローバルリーダーの育成」

③平成27年度北信越地区高等学校教頭・副校長会連絡協議会

期日：11月13日(金)

会場：ホテル犀北館(長野市)

発表者：小川幸司教頭

発表テーマ：「世界・日本・地域と私たちをつなぐ

～スーパーグローバルハイスクール2年目を走りながら考える～」

④長野県高等学校長会 秋季総会・研究協議会

期日：11月16日(月)

会場：ホテル信濃路

発表者：大井基成校長

発表テーマ：「学力向上の取組み

～スーパーグローバルハイスクール指定2年目の状況も含めて～」

⑤長野県高等学校長会 普通部会 第2回総会・研究協議会

期日：1月21日(木)

会場：ホテル信濃路

発表者：大井基成校長

発表テーマ：「SGH：長野高校の取組み」

⑥『教育指導時報』799号, 2016年3月刊

発行元：長野県教育指導時報刊行会(県教育委員会教学指導課内)

執筆者：小川幸司教頭

報告テーマ：「スーパーグローバルハイスクール, 2年目を走る」

(2) SGH 通信

生徒, 保護者向けに発行するとともに, 学校HPで公開している。

(3) 英文ホームページの充実

昨年度開設した学校の英文ホームページについて, よりわかりやすいものにリニューアルした。

4 他校からの学校訪問の受け入れ

	月 日	学校名	訪問者	備考
1	5月27日(水)	長野県松本県ヶ丘高等学校	教諭2名	
2	6月10日(水)	湘南学園中学校高等学校(神奈川県)	教諭2名	SGHアンバサド
3	9月25日(金)	広島県立尾道北高等学校	教諭2名	
4	11月17日(火)	岩手県立黒沢尻北高等学校	教諭2名	

5	12月3日(木)	石川県立金沢泉ヶ丘高等学校	教諭2名	SGH指定校
6	12月4日(金)	東京都立町田高等学校	教諭1名	
7	2月18日(木)	青森県立青森高等学校	教諭2名	SGH指定校
8	2月23日(火)	鹿児島県立甲南高等学校	教諭2名	SGH指定校

5 新聞報道等

	月 日	掲載紙	内 容
1	4月10日(金)	信濃毎日新聞	「高校生記者のコーナーwith you 友」 (米国リーダー研修と活動の様子)
2	5月13日(水)	信濃毎日新聞	「あしたはぐくむ～SGH 県内2校の挑戦(下)」
3	8月4日(火)	長野市民新聞	「地域の課題 実習で理解を」 (FW での七二会の遊休農地対策学習の様子)
4	8月11日(火)	日本農業新聞	「地域の課題 肌で知る ソルガム収穫体験」 (FW でのソルガム収穫体験の様子)
5	9月19日(土)	長野市民新聞	「エムウェーブ五輪展示関連博物館の国際組織加盟へ 長野高生プレゼン」
7	11月17日(火)	長野市民新聞	「SGH 指定の長野高2年生 地域課題の解決研究」
6	11月21日(土)	日本農業新聞	「農村・農産物など調査研究成果発表」 (2年生課題研究発表会 善光寺グローバルプレゼミットの様子)
8	11月26日(木)	ナガラボ	「グローバルな視点から地域の魅力と課題を発信する (OMN 総会でのプレゼンを中心に) 長野高校2年中島優里さん, 間島晴輝さん」

IV 成果と課題

(1) 研究開発単位 I 課題研究教育課程の開発

以下の科目を開発する。

- ・ 1 年次 「長野のグローバル戦略を探る」 1 単位, 「グローバル経済」 1 単位
- ・ 2 年次 「世界から見た長野のグローバル戦略」 1 単位
- ・ 3 年次 「今後の長野のグローバル戦略」 1 単位

成果	次年度への課題
<p>①「2 年次課題研究発表会（善光寺グローバルプレサミット）」と「1 年次課題研究中間発表会」を開催し、課題研究の成果を交流し合えたこと</p> <p>▽「課題研究発表会」では 15 分散会と全体会において 2 年生全員 59 班が課題研究発表を行い、1 年生全員もリスナーとして活発に討論に参加した。ゲストである信州大学の留学生・SGH 指定校である上田高校生も全体会に加わり、討論を深めることができた。18 班が英語によるプレゼンを行ったほか、研究内容の一部に英語を使用した班も多かった。「課題研究中間発表会」は 1 年生全員が 15 分散会においてプレゼンを行った。エビデンス第 3 章-I-1-(1), 1-(2), 1-(3)に見られるような社会参画・批判的分析力・コミュニケーション能力に係る意識変化が見られつつある。</p> <p>②課題研究の組織的指導体制を構築したこと</p> <p>▽3 名の SGH 事業推進室常駐教員に加え、1・2 年の総合的な学習の時間の担当教員と、それぞれの班担当指導教員が組織され、学校をあげて課題研究を推進した。また、教員間の共通理解を進めるために、8 月 27 日（木）と 10 月 27 日（火）の 2 回、SGH 職員研修会を開催し、ワークショップ形式で討論をした。エビデンス第 3 章-I-3-(2)に見られるような教員の SGH 事業への肯定的評価が進んだ。</p> <p>③課題研究の基礎となるスキルの育成をはかるとともにクロスエリア型探究をキャリア教育とリンクさせたこと</p> <p>▽英語ディベートを通じた多角的な分析のトレーニングや関連文献の読書などの指導を 1 年生に徹底した。また課題研究のテーマ設定にあたり、個々</p>	<p>①信州大学・県短期大学等の高等教育機関や企業との連携をより一層はかる</p> <p>▽課題研究発表会における指導やファシリテーターとなる大学院生の紹介など、信州大学との連携強化が進んだ一年間であったが、定常的な関係を築いていけるよう、これまでに作り上げた個別の関係をより広汎かつ組織的な関係に展開していく必要がある。また、連携地域団体や企業、行政機関が増え、フィールドワークの受け入れ先としてだけでなく研究への助言や地域課題解決に向けての意見交換などの関係が深まっている。フィールドワーク先が課題研究発表会の講師となるような「長野高校モデル」を次年度は構築したい。</p> <p>②「プロジェクト」を再定義し、最終目標の混乱がおきないようにする</p> <p>▽長野県の課題解決を「実践する」ために「プロジェクト」という考え方を導入したが、研究の最終目標について全員に何らかの実践を求めることにあり、その水準にまで達しない生徒たちの不完全燃焼感が残った。次年度は、「自ら問いをたて、その問いを追究する中で社会が直面している課題解決の方策を考察する」ことが「プロジェクト学習」であると再定義し、「できれば何らかの実践活動を行うことが望ましい」と、実践については努力目標としたい。</p>

<p>の大学で学びたい分野を意識させた。そのために「観光」を「地域の魅力や課題を再発見すること」と再定義し、狭義のマーケティング研究のみにならないようにした。エビデンス第3章-I-2-(1)に見られるような1年生における研究テーマと進路志望とのリンクの進展や、SGHの学びの多面的評価が進んだ。</p> <p>④課題研究の成果の一部をオリンピック記念館ネットワーク（OMN）総会で発表し、Mウェブの連盟加盟に貢献したこと</p> <p>▽「地域の魅力を再発見し、世界に発信する」という課題研究のテーマを国際的な舞台で実行するために、選抜された2年生2名の生徒がカナダに派遣され、英語でプレゼン・質疑応答を行った。日本のオリンピック関連施設としては初めてのOMN加盟を実現する原動力となり、SGHの学びが社会貢献につながる第一号となった。エビデンス巻末の「参考資料2」に長野市の広報誌に紹介されたものを掲げる。</p>	<p>③「個の学習」と「協働の学習」の往還システムを構築する</p> <p>▽2年生の課題研究において、グループ学習の前提となる「個」の学びへの指導が不十分であったために、グループで取り組む利点が活かさない憾みを最後まで解消しきれなかった。そこで、1年生については、「個」の学び（個人レポート、課題図書のみまとめ作成等）と「協働」の学びを常に往還するシステムを構築しようとした。次年度はLL教室と社会科教室に情報処理室機能を持たせ、1人1台のPCを保障し、「個」の学びを丁寧にサポートする指導体制を構築したい。今年度、同窓会・PTAがSGH事業のために約900万円の基金をつくって下さったことを活用したい。また、「個」の学びと「協働」の学びを組み合わせる評価するルーブリックの評価を系統的に整備したい。</p>
<p>(2) 研究開発単位Ⅱ-(A) 海外等研修</p> <p>以下の海外等の研修を開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次 訪日台湾高校生とのワークショップ ・2年次 台湾研修 ・1, 2年次 米国リーダー研修 	
<p style="text-align: center;">成果</p>	<p style="text-align: center;">次年度への課題</p>
<p>①訪日台湾高校生にNAGANOの魅力英語で伝えるワークショップを実施できたこと</p> <p>▽12月15日(火)に台湾から来日した国立岡山高級中学の生徒32名に対し、1年生が英語による善光寺ガイドを行い、交流を進めた。そのために参加生徒は計5回の準備学習を行い、善光寺一帯の多様な魅力を外国人観光客に伝える工夫を重ねた。エビデンス第2章-II-3の生徒の感想にあるように、国際的な交流をする中で何が大切になるかを学んだ貴重な機会となった。</p> <p>②2年生全員で台湾を訪れ、高雄市の7つの高級中学の高校生たちにプレゼンテーションを行い、他国の人々とわかり合える実感を体験できたこと</p> <p>▽事前学習としてgoogle Apps等で交流を重ねてきた台湾の高校生に課題研究のプレゼンテーションを行い、討論を深めた。さらに日台の高校生同士がペ</p>	<p>①台湾での課題研究のプレゼンテーションが、各自の研究内容の一層の深化につながる指導方法を開発する</p> <p>▽台湾で高校生と討論したことで、課題研究に対する新たな視点を得たという生徒たちが何人もいた一方で、英語でプレゼンテーションすることで精一杯だったり、相手に知的好奇心を抱いてもらえずに苦戦したりする生徒もいた。台湾での討論を研究の深化につなげるような指導を開発することが課題である。</p> <p>②台湾でのフィールドワークが課題研究の一層の深化につながるようなプログラムに進化させる</p> <p>▽台湾研修旅行のフィールドワークの充実度に差が生じたことは否めない。台</p>

<p>アを組んで半日を過ごすワークショップを行い、異なる社会・文化に属する相手と、母語以外の言語を通じて、心を通わせ合う体験を重ねた。【エビデンス】第3章-I-1-(3)に見られるように、英語のコミュニケーション活動に対する抵抗感が減ったという感想をもつ生徒が2年生では多い。</p> <p>③米国リーダー研修を生徒が主体的に企画し、自ら学ぶ意義を多くの生徒が実感できたこと</p> <p>▽業者に依存せず、海外交流アドバイザーにコーディネートしてもらいながら、1年生の参加生徒が主体的に研修計画をたてたことで、課題研究のプレゼン交流はもちろんこと、実りのある交流を実現するための試行錯誤を体験的に学習した。任されることで生じる責任の重さと、自分の創意を実現できる楽しさを体験した生徒は、帰国後SGHスタッフとして課題研究の協働的な学びをリードした。また5月23日(土)に1・2年生全員・保護者・地域の人々の前で「米国リーダー研修報告会」を行い、学んだ成果を学校全体で共有した。【エビデンス】第2章-II-2の生徒旅行記に生徒の自己分析した成果を掲げる。同じく第2章-II-2に旅行報告のプレゼンを聞いた他の生徒の感想を掲げる。</p>	<p>湾大学や嘉義大学などの高等教育機関の研修は有意義であったと生徒は感じているが、その他のフィールドワークが名所めぐりのようなものになってしまった面もあった。現地でのインタビュー活動や、新たに開拓した現地企業・研究所等での研修プログラムを考えていきたい。</p> <p>③米国リーダー研修の事前学習について コミュニケーションや歴史・政治についての学習を充実させていく</p> <p>▽今年度は米国リーダー研修のメンバーが決まり次第、事前学習会を定期的を始め、英語によるプレゼンテーションとディスカッションの訓練や、英語でアメリカの政治を考えるレッスンを行った。また米国大使館副領事との交流の機会をもった。次年度はさらに多くのアメリカ人と交流する機会を事前に持ち、渡米時の研修を一層深みのあるものにした。</p>
<p>(3) 研究開発単位Ⅱ-(B) コミュニケーション能力向上のための教育課程の開発</p> <p>Ⅱ-(B)-1 以下の科目を開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次 「英語プロジェクトⅠ」 ・2年次 「英語プロジェクトⅡ」 <p>Ⅱ-(B)-2 英語授業の改善を図る。</p> <p>Ⅱ-(B)-3 善光寺グローバルサミット及びプレサミットを実施し、世界の高校生と課題研究内容を英語で討論する機会をつくる。</p>	
<p style="text-align: center;">成果</p> <p>①「英語プロジェクトⅠ・Ⅱ」の学習を通じて4技能を育成し、コミュニケーションで発信型の英語教育を推進できたこと</p> <p>▽9月5日(土)に外部から25名の大学・企業関係の講師を招き、1年生282名全員が“My Favorite Presentation”と題したスピーチを行い、「英語プロジェクトⅠ」の中間成果を発表した。2年生は上記の台湾研修旅行の事前学習を進めた。SGH特設科目ではない英語の授業においてもペアワーク等を重視したアクティブな授業形態が多くなり、従来の訳読中心の授業から4技能</p>	<p style="text-align: center;">次年度への課題</p> <p>①「英語プロジェクトⅠ・Ⅱ」と課題研究との有機的な連関をより一層作れるようにする</p> <p>▽今年度の2年生をみると、課題研究においては10月の課題研究発表会に向けて全力集中し、それと並行して英語プロジェクトⅡにおいて台湾での研究発表の準備をすすめなければならないという、大変過密な学習内容に苦勞した。そのことが課題研究や英語プロジェクトⅡについての授業評価の満足値が必ず</p>

<p>を重視したコミュニカティブで発信型の授業への転換が進んだ。エビデンス1・2年生のECC班のチームが第10回全国高校生英語ディベート大会で3位に入賞した。指導方法の系統化が進み、第3章-I-2-(3)に見られるように、英語プロジェクトの授業を肯定的にとらえる生徒の数が1年生において大幅に増加した。</p> <p>②「善光寺グローバルプレサミット」で多様な国籍の若者を前に英語をまじえて課題研究発表を行い、発表内容について討論することができたこと</p> <p>▽11月12日(木)に「2年次課題研究発表会(善光寺グローバルプレサミット)」を実施し、アメリカ、イギリス、中国、フランスなどの若者をゲストに招き、18班が英語で課題研究発表を行い、会場との質疑応答の中で討論を行った。それにより多様な視点で物事を検討する醍醐味を味わうことができた。プレゼンは日本語であったが、研究内容の一部に英語を使用した班も多かった。エビデンス第3章-I-2-(1)に見られるように、課題研究の授業評価についての生徒の満足度は高いとは言えず、更なる授業改善が焦眉の課題である。一方で第2章-IIIに見られるように、グローバルな学びに関する様々な機会に本校生がきわめて積極的にチャレンジするようになっている。</p>	<p>しも高くない理由であろうと思われる。次年度は、科目間の有機的連関をあらかじめ準備し、無理なく創造的に学ぶようなカリキュラムを開発したい。</p> <p>②「善光寺グローバルサミット」において3年間の課題研究の成果を英語の政策提言にまとめ、世界の学生たちと討論を行う</p> <p>▽次年度はSGH1期生がSGHの学びの集大成として「善光寺グローバルサミット」を実行する。NAGANOの観光についての政策提言を英語でまとめるとともに、それを全校生徒及び世界の学生たちの前で発表し、英語での討論を行う。世界の学生たちとアイスブレイキングしつつ、深い討論ができるように、サミット第1部として、善光寺の宿坊にて3年生のSGH選択者が合宿をする予定である。第2部が全校での討論会となる。3年生のSGH選択者は、これまでSGHスタッフとして課題研究をリードしてきた生徒たちでもある。このサミットの学びを充実したものにすることが、次年度の最大の課題であると言えよう。</p>
--	---

まとめとして

昨年度はSGH事業を手さぐり状態で進めたため、組織的な指導体制が十分に組めず、課題研究についても試行錯誤の状態に生徒をおいてしまった。その反省をもとに今年度は組織を改め、科目担当者や班担当者の横のつながりを重視しながら、1年生・2年生全員にSGHの学びを指導してきた。協働の学びをいかに充実させるかという点と課題研究と英語の相互作用の深化という点が、いまだに大きな課題であるが、今年度の取組によって克服すべき点がより明瞭になったので、次年度は必ずより発展した成果を出せるはずである。**エビデンス**第3章-I-3-(2)に見られるように、教員の側のSGHに対する取組みの意識が、昨年度より大幅に向上している。組織的に事業に取り組んできたことと、SGHの学びの意義が職員間で共有されてきたことのあらわれである。次年度に学びの質をさらに高めていくことで、さらにこの数値を上げていきたい。長野県のグローバルな学びの牽引役になれるよう、教員一同たゆまぬ研鑽を積んでいく覚悟である。